

玉鬘とわたし

今日 あした

数日前のことだ。食後にぼんやりテレビを見ていたら、「退屈そうだね。これ、会社の健保で補助金が出るから、亜矢が受講してみたらい？」

夫の勝男がカルチャースクールのパンフレットを、傍らに置いてあるカバンから取り出してテーブルの上に置いた。それには絵画の観賞、スケッチ、ダンス、歴史、芸能、落語・その他、ありとあらゆるものが載っている。会社で「定年を迎えてからの豊かな老後」というシンポジウムがあり、カルチャースクールと共同で企画をしたそうだ。

それからというもの、毎日パンフレットを熟読して目に付いたのが

「竹中光先生の源氏物語」、という講座。

竹中光は、作家、文芸評論家の肩書きで、度々テレビで見かけるちよっとおさまのような人で、最近、本を出した所為か、テレビでも源氏物語の解説をしている。

源氏物語というと、今までは後朝きんぎぬの文かみに代表される歯の浮くような、

「あなたを思うと涙が止まらない」的な言葉を連想して毛嫌いをしていたのだが、テレビでの竹中光の話がとても面白かったので、そんなに面白いのならちよっとかじってみようかなという気になった。

そう言えば、いとこの詩織は、源氏にかぶれていたかも……。そう思って誘ってみようと電話をすると、その講座にはもう一年も前から通っているそうだ。

「面白いよ、今期は『玉鬘から』って書いてあったでしょう。ちよっと良かった。亜矢は、源氏の女君というなら、玉鬘だから」

詩織は父の妹の娘で私とは同じ年。さばさばした性格で、およそ源氏物語とは結び付かないのだが……。

「なあと、玉鬘って」、私は源氏物語には学校の授業以外、触れた事がなかった。「夕顔は知っているでしょう。ほら、六条の御息所みやすどころの怨霊に呪い殺された……その娘よ」

「夕顔は知っているけど、その娘？ 知らなかったわ。それで、どうして私が玉鬘なの」

「亜矢は、両親が離婚しちゃったから、おばばに育てられたジャン。いわば、まっとうな育てられ方とは違うでしょう。玉鬘も、母親の夕顔は死んじやったし、父親の頭の中将は、まだ幼いころから通って来なくなったのよ。なんたって当時は「通い婚」だったから……それで、おばばではなくて、乳母に育てられたのよ」

さすがに良く知っている。何と言っても理想の男性が、光源氏で、今だ独身の詩織である。

電話で散々長話をした挙句「竹中光の源氏物語」の講座が始まる前に、泊りに来てレクチャーをしてくれることになった。彼女は薬剤師で、親の経営する薬局で働いているので、かなり時間的に自由が利くらしい。

カルチャーの前日、詩織がワイン片手にやってきた。

「これ、上等じゃないけど、結構いけるよ、チリワイン」

私は台所にあるもので、簡単なつまみを作り、何種類かテーブルに並べた。

詩織は水菜とオイルサーディンに醬油をかけたものを一緒に口に入れて

「おいしいジャン！」と言った。

「勝男さんが海外出張でこの所しばらく一人暮らしなのよ。毎日、簡単なもので済ませているものだから、こんなもので、ごめんなさい。さっそくだけど、源氏物語のレクチャー、よろしく」

と言うと、待ってました！とばかりに、ワイングラスを乾杯でもするようにちよつと持ち上げてから話し出した。

「亜矢もご存じとは思うけど……桐壺に御殿をもらっている更衣が帝に溺愛されすぎて、競争相手の女房・更衣に妬まれ苛められて幼い皇子を残して死んでしまいました。皇子は普通なら、母親の実家で育つはずなのだけど、何と言っても溺愛していた人の忘れ形見でしょう、父帝ちちみかどは手離てりかしたくなくて膝下ひざもとで育つよ。

彼は幼いころから、天性の美貌の上に、学問、音楽の才も並はずれてあったから父帝はほんとうは皇太子にしたかったのよ。だけど、桐壺って呼ばれている母親の実家があまり身分が高くなかったから苛め殺されたようなものだったジャン。帝自身もいつまでも生きていられるわけではないし、泣く泣く臣籍に下して、源姓を与えたのよ。そこで初めて、光り輝くような美しい皇子だからって光源氏とよばれるようになったってわけ」

「その辺りまでは、学校で習ったのでうろ覚えに覚えているわ」

「源氏物語って、授業の時はぜんぜん面白いなんて思わなかったジャン。それが、竹中先生の訳本を読むと、紫式部が書こうとしている事が見えてくるのよ。」

光源氏はね、十二歳で元服をして左大臣家の婿になるのよ。その時の心境が書いてあるところ、読んで見るね。

『私は元服を終えた後、身の安泰を引きかえに左大臣にこの身を売り渡すのだと思つた。買ひ手の男の欣喜雀躍たる姿が美しく見える筈がない。少年の日に別れを告げるその時の華やぐ宴席に、人知れず、生臭いこの世の靄の匂いを感じとっていた。私は売られたのだ。その夜、宴席を退出させられ、後見となった左大臣の屋敷へと向つた。一人前の男になる為の儀式を演じさせられる為に…』

左大臣の娘（後に葵とよばれる）は四歳年上の十六歳。元服を終えたばかりの私を前に、美しい顔を強張らせ、どことなく落ち着かない様子を見せていた』

ね、元服って言うと、大人になるかならないかの時期でしょ。今で言うなら十七・八の青年ジャン。その時期の青年というか、子供というか…：は、気に食わないことがあつたら、こんな風に考えて当然だよ。こんな風に見える紫式部って、凄いと思わない？」

「詩織は文学少女だったものね。なかなかの深読みね」

「青年、光源氏は、感じたことに純粹に反応して、いちいち傷ついているのであります」

「うん、うん。詩織の光源氏への愛おしさが伝わってくるわ。」

ちよつと待つてね、もう少しお腹の足しになるものを持つてくるわ」

そう言うて、ちよつど蒸し上がった里芋を出した。それを見て詩織が

「皮は、私が剥くわよ」と言い、その間に明太子を切り、アボガドをワサビ醤油でからめ、生ハム、チーズ、キュウリやトマトも適当に切つて、食パンを焼いて四等分し、冷蔵庫にある佃煮類を出し、皮をむいた里芋も半分切つて大皿に盛つた。

「パンと里芋の上に適当に載せて食べて」

「色どりがいいジャン！いただきます」…：女同士の楽しみである。

「ところで、亜弓さんってどんな人だったの、小さい頃に会つたけど、全然覚えていない」と詩織が亜矢の母親のことを聞いた。

「おばあさまが悪口ばかり言つていたでしょう」

二人の祖母は、背筋のびしつと伸びた、痩せて背の高い人だった。昔は小学校の先生をしていたと言つていたが、亜矢には両親の悪口ばかり言つていた。

「そう言われてみると、おばばは、あまり良い事は言つてなかつたわね」

私は、小学校三年の時のことを話した。

「ある日、家に女の人が訪ねて来たのよ、まだ若い綺麗な人で、応接間で向かい合って話していたのを覚えているわ。母は私を引き寄せてぎゅうっと力を入れていた。その人は一方的に感情的に喋っていたのに、突然立ち上がって『宏さんは私を愛しているのよ。あなたはここを出て行くべきよ!』って母を指さして言ったの。交際相手の奥さんに向かって失礼でしょう。幼い私だっけずいぶん理不尽なことを言う人だと思っただわ。でも、母は何も言えないのよ。怯えきっているのよ」

「亜弓さんはおとなしい人だったんだ」

「どうかしら： 優しい人だったとは思うけど。でもおばあさまに言わせると変わった人みたい。私の名前は母がつけたのよ。私が生まれた時、父がふざけて『君は弓だから、娘は矢だね』と言ったら真に受けて本当にそうしてしまったのだった。父はそういう母を面白がっていたみたいだけど、おばあさまはあきれていたわ」

「成程、言われて見れば攻撃的な名前ね。でも、そもそも亜弓って名前が変わっているよね。それで彼女はどうしたの」

「母?： 母の兄がサンフランシスコにいたからそこに行ってしまったの。よほど怖かったのじゃないかしら、あの人が」

「女の人は?」

「父と一緒にいたわよ。父はもうべったりで見たくもなかったけど…… 今から思うと、母は、父に愛する人が出来たから自分から出て行ったのじゃないかしら。両親が争う所なんか見た事無いもの」

「ふーん、離婚までしてね。それにしても、亜弓さんって、夕顔みたいな人だね」

「夕顔がどういう人かはわからないけど、おばあさまはひどいことを言っていたわよ。自分の考えが無いパラサイトみたいだって、しっかりしていないから何にでも怯えるのだった。おばあさまは心配だから私を手元に置いたのに、アメリカに行った途端、アメリカ人と再婚したから、又パラサイトだわって。私には、自分の考えを持った筋の通った人にならなければいけないって、うんざりするほど言われたわ」

「あのおばばなら、言いそうだね」

「ところで、玉鬘はいつ出てくるの」

「じゃあ、本格的にいくね。」

玉鬘、という名前は、源氏が詠んだ歌からついたんだよ。

恋ひわたる身はそれなれど玉かづら

いかなる筋を尋ね来つらむ

夕顔を恋する気持ちは、昔のままだけど、あの子は、玉かづらのように、幾重にもいりくんだ糸を手繰って、ここに今いるのだ。と言うような歌なのよ。

「巫矢は、夕顔が六条の御息所の生霊に呪い殺されたのは知っているよね」

「ええ、住む人もない荒れ果てた邸で呪い殺されたんですよ」

「秋のさわやかな日だったのよ。源氏と夕顔が睦んでいたんだけど、やがて夜になった。灯した明りがふっと消えて真つ暗闇になり、夕顔は怯えきってしまった。源氏は、夕顔の乳母の右近を怯える彼女のそばに置いて、明りを探しに行ったのだけど、その間に夕顔はショック死をしたのよ。」

源氏はその時十七歳。気が転倒してしばらくは半病人になったのよ。夕顔に会えなくなったことが悲しくて、右近と彼女の話ばかりしていた。

そこで、彼女には娘がいることを知るのである。源氏はもう夕顔には会えないのだつたら、せめてその子を自分で育てようと思ったのよ。でも、源氏は左大臣家の婿で、その上、その子の父親が義兄（後の頭の中将）だったこともあって、知られたくなかったわけ。それで夕顔の娘（後の玉鬘）の乳母が、夫の太宰の少弐の任地に一緒に連れて行くことを、源氏は知ることが出来たのに、育てるのを諦めて、黙って見過ごしたのよ。

心地よい春の宵である。

居間から一段上がった所にある畳敷きの和室に、二人分の布団を敷き、その上に五十半ばの女二人、どっかりと座って、湯上りの顔にピタピタと化粧水をつけ、パツクまでして横になると、そのまま寝てしまった。

いよいよカルチャー一日目。

竹中光先生は、テレビで見た通り、太めでお公家さんを思わせるような雰囲気の人だった。

「夕顔が行方知れずになってから、乳母の夫である少弐は船で受領の筑紫までお連れして、乳母と共に、幼い姫君を御主人とあがめ、大切にお仕えするのです。平安時代は身分制度がはっきりしていましたからね」。

竹中光先生は左肘を少し内側にして首を傾げながら、小指を立てて眼鏡を、ずり上げて言った。

そして、身振り手振りを交えながら、幼い姫君（後の玉鬘）の成長過程と、美しく成人して近隣の豪族に言い寄られ、逃げるように京に上って、夕顔の乳母だった右近と、偶然巡り合うまでを思い入れたっぷりに語った。

竹中先生は五十を少し過ぎてるように見える。

熱演で咽が乾いたのか、硝子の水差しから、蓋になっているコップに水を入れて、小指を立てながら飲んだ。

「源氏は、右近から夕顔の娘が見つかったと聞き、『顔や姿は、あの亡き夕顔に劣らないか』とお聞きになります。右近は『母君よりもずっとお美しくご成人なさっていらつしやいました』と申し上げました。」

それをお聞きになつて、源氏はその人を自分の娘分として六条の院にお迎えしようと思うのですが、紫の上が、やきもちを焼かれるかも知れません、自分とは血のつながりのない姫君をすんなりと招くことなんかできませんよ。そこで右近に耳打ちをして、玉鬘が夕顔と源氏の娘であるかのように思いこませます。ずるいですね、源氏は。娘なら紫の上に何の遠慮もなくいつでも会えますものね」

「ちよつと待つて、夕顔の娘が美しくなかつたら、娘分とはしないのかしら」と突っ込みを入れたくなるほど、私は竹中先生の話に入りこんでいた。

先生は六条院の復元図をスライドで映し出した。

「六条院は広大で四つの町にわかれていました。それぞれの町に源氏と係わりのある女性がお住まいになつていらつしやいます。一番大切な紫の上は春の町、明石の御方は冬、秋好む中宮は秋、花散る里は夏の町です。源氏は、玉鬘を花散る里に託して夏の町の西の院に住ませ、お世話をお頼みになりました。源氏にとつて花散る里は、気の許せる甘えられる人だったので。ほら、自分の息子の夕霧を任せたとように……。」

姫君が美しいと聞いて喜んだ源氏は、六条院に又、若い人たちが集まつて賑やかになればよいと思ひました。当時源氏は三十七歳、女房達の平均年齢も上がつていきますからね。そこで弟宮の兵部卿など、院に出入りする色好みの貴公子たちの心を惑わして、姫君に言い寄るのを見て楽しもうという心づもりもありました。中年はいやらしいでしょう。当然、紫の上は、娘にそんな気持ちを持つなんて『変な人!』と思つているのよ。」

竹中先生は噂の通り、おかまなのかしら、興に乗れば乗るほど女性っぽく、身振り手振りをつけて語る。

「源氏は、一行が夏の町に落ち着いたので、始めて姫君の所にお出かけになりました。玉鬘の乳母たちは光源氏というお名前は始終お聞きしていたけど、長年田舎住まいをしてきましたでしょう、まさかそれほどの人とは思ひも掛けませんでした。それだけに几帳の隙間からちらつと拝見した源氏のお姿が、あまりにお美しかったので、この世のものではないようで……恐ろしいとさえ感じたのですよ。源氏の方も、姫君が夕顔と同じお美しい目もとをしていらつしやるのを満足し

て見ていると、姫君はたまらなく恥ずかしくて、顔をそむける御様子が、難のつ
けようもなく美しいので、すっかり嬉しくなつて

『親子の仲で、こんなに長い間別れ別れになつて、年月が過ぎてしまった例もな
いことでしょうかね。今はもう、そんなに恥ずかしくて、子供のようにしていら
つしやるお年頃でもないでしょう。長年の積もるお話も申し上げたいと思つてい
るのに、どうしてそんなにはにかんでばかりいらつしやるのですか』と恨み事を
おつしやいます。

ね、おかしいでしょう、源氏は父親でもないのに、親子だなんて言うので、玉
鬘だつて、困ってしまうわよね。何が何だかわからなくてお返事の仕様もないあ
りさまも、昔の母君に似ていて、源氏は思わず「かわいい！」つて思うのよ。」
竹中先生は、もうすっかり女言葉になつている。

「平安時代、教養のある女性は、男の前で顔を見せることはなかったのよ。玉鬘
は、すっかりした乳母に育てられ、立派に成人なさつていらつしやるので、いく
らお世話になつているからつて父親でもない人から、親子の仲で……と言われま
してもねえ。

でも、源氏は、玉鬘の父親の頭の中将のことは言いにくいでしょう。

帚木の章の「雨夜の品定め」で、頭の中将が、行方知れずになつてしまった「
良い女」の話をしていたのを聞いて、源氏は夕顔に会つた時、「良い女」はこの
人かもしれないと思ひながら、その女を探していた頭の中将には教えないで、自
分が言い寄つたのよ。その挙句に、悲惨な亡くなり方をさせてしまった。こんな
こと、娘には言えないでしょう。

はい。今日の授業は、ここまでにします。玉鬘の父親のことを源氏が話さない
理由は、帚木と、夕顔の章で出てきましたので、読んでご覧になるといいです
よ」

竹中先生はそう言つて、太つた身体を身軽に動かして教室を後にした。

平日の午後一時からの講座は、ほとんどが五十過ぎの子育てが一段落をした主
婦か、六十過ぎの女性が大多数だった。その中に若い女の子もいて、何しろ先生
を除く全員が女性である。

カルチャースクールの外に出ると、林立する高層ビルの中に、咲き終わった桜
の木が柔らかな淡い緑の葉をつけて、ここに一本、あそこにも一本と春の趣を演
出している。受講生はまだ源氏物語の世界の余韻にひたり、三々五々近くの飲食
店に消えて行く。

私も詩織と二人で近くのホテルの喫茶室に腰を落ち着けた。春とはいってもま

だ少し寒いので、温かい室内に入るとほっとする。やがて注文をしたココアが来て、その湯気の立つ温かいココアを両手で持ちながら口元に持って行く。至福の時だ。

他にも同じ講座を受講している一団がいて、源氏物語の中でどの女君が好きかとか、自分は誰に似ているとか言うたびに、朗らかな笑い声が聞こえてくる。

「ねえ、私は玉鬘だつて言ったけど、詩織は誰なの」

と聞くと、内緒！だそうだ。まあいいでしょう。

「先生が帚木と、夕顔を読むようになって言ったジャン。その帚木が、源氏が女性遍歴を始める前の予備意識っていうか、好奇心満々の源氏が『女性とは何ぞや』と、先輩たちに聞かされる所なのよ。」

玉鬘の実の父親の頭の中将は、妻の兄だから源氏にとつては義兄でしょ、源氏は左大臣家の婿だけど、義兄は右大臣家の婿で、凄く魅力的なんだな、これが……。

何もすることもない雨の夜、御所の中にある源氏の宿直所に、頭の中将や男盛りの男たちが集まって女の品定めをするのよ。源氏が一番若くて経験もないジャン、年上の遊び人達は、源氏に女たるものの蘊蓄を語るってわけ。それがふるって、糞みそに言うんだけど、現在に全部通じちゃうわけ。

天上人と繋がりのある育ちの良い娘はとりあえず上の品ジャン。その男たちが言うには、中の品の中にこそ面白い女がいるんだって。

受領の娘なんかは中の品で、紫式部や清少納言などはこの中に入るのよ。父親が地方の任国に行くから、見聞きしたことを聞く機会もあつて、話題が豊富で面白い女がいるってわけ。

その他に、もうさびれていて、こんなところでも人は住めるのかと思うほど傾いて、雑草が生い茂って門だつていつ開いたかわからないような家の中に、思いがけず愛らしい娘がいるとワクワクするって話しているくんだりがあるんだけど、夕顔はこれに当てはまる、中の品じゃないかと思うのよ。

源氏物語って言うのは、主語が無いジャン。だから、夕顔もストーリーの中で詠んだ歌で、源氏がつけたあだ名を呼び名にしているってわけ。同じ人を頭の中将は、歌の中で常夏と詠んだから、常夏と夕顔は同じ人なのよ。

彼女の親は三位の中将だったのだけど、両親とも早くに死んでしまって、すっかり荒れ果てた邸に乳母たちと暮らしていたのだけど、そこに頭の中将が通い始めたのよ。四年くらい通って、娘も出来ただけ、頭の中将の奥方で例の右大臣家の家付き娘が、通っていることを知って、脅しを掛けて来たってわけ。夕顔はこわくなって、引越そうと思ったけど当時のことだから、陰陽の事なんか気にして、一時五条にある乳母の家に身を寄せたのよ」

「夕顔はかわいそうね。頭の中将との間に子供までいるのに…」

「そうよ、親がないから、彼だけを頼りにしていたのよ。それで、頭の中将に文をおくるのよ」

「やまがつ いおり かき山賤の庵の垣は荒れるとも、衣れはかけよ撫子の露」と…」

夕顔というのは、奥ゆかしい質で自分から誘うようなことをする人じゃなかったのよ。いわば決死の覚悟で文を出したのだけど、頭の中将は

「珍しくも娘にかこつけて催促がましいことをすることよ」

と思つて出かけて行くのよ。それで

「あきまじる色はいずれと分からねども、なお常夏にしくものぞなき」

「娘の撫子よりも、同じ名前なら、私はお前の常夏の方が大事だよ」と返歌をして、添い寝しながら機嫌を取るのよ。馬鹿にするんじゃないよ！つて言いたい所を、うたで訴えるのよ。

「うちぬう袖に露けき常夏の 嵐吹き添う秋は来にけり」

頭の中将は「露」の「嵐」のと、一体、夏の花になにが起こったのだ、とは思うけど妻が夕顔を脅していることを知らないから、何のことかわからないってわけ。夕顔は涙がこぼれるのだけど、醜態を見せたくない。

頭の中将は推し量ることも出来なくて、又、ご無沙汰しちゃって、夕顔は仕方なしに、身を隠すのよ」

かわいそうな夕顔！ 母に似ているかも知れない。いい恰好して何も言わないで身を引くところなんか。

「私は小さい頃、祖母が母を否定するたびに、心の中で反発していたのよ。母が私を愛していたことはいつも体中で感じていたわ。母にとっての的確な言葉や行動が他の人とは違っていたのよ。本やおもちゃを買ってもらった時や、教科書を配られた時なんか、読んであげようとか、遊んであげようとか、教えてあげようとか、考えたかどうかはわからないけど、自分が一番楽しんでいたので。私はなんでも母と一緒に楽しんでいたような気がするのよ」

「ああ、夕顔もそんなところがあったかもね。」

夕顔は、頭の中将の奥方の脅しから逃げて山里に移り住むつもりだったけど、

今年は方角が良くないとかで、かたがいがい方違いをして五条にある乳母のごみごみした家に身を寄せていたのよ。そこで、源氏と出会うの。

源氏が板垣の内側に涼しげな花を見つけたのよ。何の花だろうと従者と話しているのを見て、乳母たちが源氏ではないかって騒ぎだしたのよ。それを夕顔も一緒に面白がって

「心当てにそれかとも見る白露の光そえたる夕顔の花」

っていう歌を扇に載せて渡したのよ「光そえたる」っていうのは、もしやあなたは光の君？ って聞いたのよ。普通に考えたら、大胆でずいぶん積極的じゃん。でも、彼女の場合は、ただ面白がっているわけ。ね、亜弓さんに通じるところがあるでしょ」

「そうね、でも夕顔は、おきな幼子や乳母たちを抱えて、源氏にパトロンになってもらいたいっていう下ごころは無かったのかしら。

それと、玉鬘が乳母たちに、ご主人とあがめたてられながら大切に育てられたというくだりがあつたでしょう。どうもしっくりいかなかったのだけど、だんだん謎が解けてきたわ。

私がおばあさまに育てられたのは、ただ孫可愛さの一念だったと思うけど、乳母一家が、玉鬘を大切に育てたのは、彼女が帝や天上人の子供を産むことが出来る可能性がある身分の人で、もしそうだったら自分達も栄耀栄華の恩恵をこうむることが出来るのよね」

何度目かの「竹中光先生の源氏物語」の講座の日がやってきた。

太った竹中先生は、時おりハンカチで額の汗を拭きながら、蛍の巻の話をしてる。

「源氏は、こともあろうに、玉鬘に恋心をうちあげ、たびたび西の対の屋を訪れては人がいない時に言い寄って玉鬘を困惑させるのです。又一方では兵部卿の恋文に返事を出すように勧めたりして… 玉鬘が応じないと、自分で探し出して読んで見てしまうのよ。」

「せめてもう少しお側近くに上がるだけでもお許し下さったなら。胸の想いの片端でも申し上げ、心をはらしたいものです」なんて書いてあるのを読んで、源氏は文面を考えて色良い返事を女房に書かせるのよ。困った人でしょう。

兵部卿が喜んで西の対の屋を訪れると、源氏は部屋の薫りにまで気を配って置いて、自分は身を隠して様子をうかがうの。

時は五月、兵部卿が訪れた夜。源氏は玉鬘の世話を焼くふりをして螢を放ち、ほのかな光に浮かぶ玉鬘の美しい姿を卿に見せるのよ。

源氏はこの時三十七歳。太政大臣という重い地位になられ、何事ものどやかに落ち着いたお暮らしぶりで、お世話になられている女君達はそれぞれの身分に応じてなんの不安もない満ち足りた日々を送っていらっしやいました。

ただ、玉鬘だけは、思いもかけない成り行きに困惑する日々でした。」

巫矢は、竹中先生の講義を受けながら、詩織が言った「玉鬘に似ている」という言葉を反芻していた。玉鬘のように、親以外の人に面倒を見てもらいながら成長すると、どこか遠慮をしながら過ごしているから、自己主張をしないあなた任せの性格になるのかな、なんて……。

完

参考資料 源氏物語 新潮日本古典集成

窯編源氏物語 橋本 治

源氏物語 瀬戸内寂聴訳